

乾燥地を拓く

鳥取大学ITPだより

4

ここシリアは大半の人がイスラム教を信仰しているだけあって、人々の生活はイスラム教が中心である。私は朝、近所のモスクから拡声器を通して大音響で鳴り響くアザーン(お祈りの時間を知らせる歌)で目覚める。

朝4時半の早朝にもかかわらず、人々は熱心に神様への祈りを捧げている。イスラム教徒ではない人にとっては騒音まがいの大音響であるが、「うるさいと思って耳を塞いではいけないことだよ、これを聞いていればきっと神様があなたを守ってくれる」とシリアの友達に言われた。彼女もまたイスラム教徒である。

国際乾燥地農業研究センターでは、私が使わせてもらっている実験室の一部が職員用の礼拝場所になっていて、ここで人々が

建物完成も神のおぼしめし

———宗教のあるシリアの生活———

1日2度、礼拝を行っている。特に女性は大変で、男性に礼拝している姿を見られてはいけないので、部屋に鍵をかけて祈りを捧げる。仕事の合間に1日何回も礼拝に時間を割くなんて、日本ではちょっと考えられないことだ。はじめは驚いたが、それだけ人々は敬虔なのだ。

街中には建設途中の建物が目に付く。シリアでは、建築に着手してから完成するまで10年以上もかかることがあるらしい。日



アレppoで最もモダン造りのモスク。伝統的な様式の造りから、近代的な外見のものまで、さまざまな造りのモスクが大小合わせて300以上もあり、人々は最寄りのもスクへ足を運ぶ。見るだけでも面白い。

本でいう納期というものはないのか?と思いつつ、これもシリア流なのだろうと解釈する。

しかし、これが自分の身に起こると、そう悠長なことは言っていられない。実験で利用するビニールハウスの建設が、いつまでたっても終わらない。いつ完成するのかと聞くと、「インシャーアッラー(神様のおぼしめしのままに)」と必ず言われる。

この世のすべては神様が決めることなので、完成するかどうかは神のお心次第です。日本人である私は、そんな言わずに早くして!とヤキモキしてしまう。

一般的な日本人(私)は宗教に関する理解も信仰心も乏しく、なじみが薄い。彼らにとっては宗教が文化・生活の一部であり、あらゆるものの考え方や行動に影響を与えている。価値観は違いますが、それはそれでいいものだと思う。

(鳥取大学大学院農学研究科学生・川口子葉)

(月1回掲載)